

● **観光まちづくりの国際比較**  
**ペーチ(ハンガリー)と名古屋から考える**

国際シンポ「観光まちづくりの国際比較」標記のシンポジウムが11月15日(土)、人文社会学部棟1階会議室にて40数名の参加により行われた。本年度の特別奨励研究に採択された「文化的多元性の保存と発展に関するペーチ大学(ハンガリー)との共同研究」(代表:山本明代准教授)の一環であり、観光まちづくりがテーマであり、私も準備から報告まで企画に加わった。

報告者はパプ・ノルベルト・ペーチ大学地理学研究所地中海東部・バルカン研究センター長、鬼頭敏広・名古屋市市民経済局文化観光部長、それに私、コメンテーターは鈴木広和・大阪大学准教授と吉田一彦・研究科長である。パプ先生は「ペーチの都市政策と観光—ヨーロッパ文化首都2010年ペーチの計画とその可能性」のテーマで、多くの写真や資料を使って報告した。前日にもペーチの写真を見せてもらったが、2000年の歴史がある美しいハンガリー第一の都市ペーチの街並みが印象的であった。ペーチ大学は3.3万の学生を擁するハンガリー最大の大学である。パプ先生から研究所刊行の分厚い本を頂戴したが、わが研究所の実態を考えると羨ましかげりだ。



当初、ペーチと名古屋の国際比較がうまくできるか心配だったが、都市政策と文化と観光というテーマで議論が一定かみあい、私も多くの示唆を得ることができた。鬼頭部長に続いて「名古屋の観光まちづくり」をテーマに報告したが、座長を務める名古屋の観光推進を考える研究会の成果を紹介できて良かった。シンポジウムについては、報告書や年報などで詳しく紹介していくが、とりあえず報告しておきたい。

山田 明(人間文化研究科教授)

● **Human & Social サイエンス・カフェ**

第16回 9月21日(日)

テーマ:「**アメリカン・ゴシックの伝統**」

講師: **田中敬子教授**

ゴシック小説とはイギリスの中世ゴシック建築の古城などを背景に、恐怖や怪奇を目的とする物語であったが、アメリカン・ゴシックの特徴はアイデンティティや人種問題が含まれることであると説明された。単なる怪奇小説と思っていたものに、アメリカの奴隷制度や人種差別の内面的問題が隠されていることを知った。

次に、具体的にエドガー・アラン・ポー、ウィリアム・フォークナー、トルーマン・カポーティのゴシック系作家の作品を詳しく解説していただき、恐怖、不気味さの裏に隠されている問題や意味が理解できた。これらの作家たちは、個人的にも文章は難しく内容はおもしろく

ないという印象があるが、一般的にも難しく、読みにくいと思われる作品が多いだろう。しかし、それぞれのストーリーを簡単にわかりやすく話していただき、田中先生の解説には引き込まれてしまった。アメリカン・ゴシック系作家にマーク・トウェインの1冊『まぬけのウィルソン』が含まれていたことは私としては意外なことで興味深く思った。

アメリカンドリームの実現の理想の国、アメリカの人々に冷静な批判的な目を向ける効果がこれらのゴシック系作家の作品にあったと思われる。最後には、だれもが読んでみようという気持ちになって、どんな本を読んだらいいか、お薦めの作品を聞くほど、参加者は文学好きになったのではないだろうか。また、私は文学作品に社会を見ることができるところから、現代人が文学作品を読む必要性を感じた。

伊藤泰子(同研究科博士後期課程)



● マンデーサロン

第 17 回 10 月 20 日(日)

テーマ: 三浦義章先生を偲んで「聞こえない人のアイデンティティ」

講師: 伊藤泰子さん(同研究科博士後期課程)



10 月 20 日(月)のマンデーサロンでは、大学院人間文化研究科博士後期課程の伊藤泰子さんの「聞こえない人のアイデンティティ」と題した報告と質疑が行われた。

報告は deaf(聾者)と Deaf(ろう者)、医学的障害者と社会文化的違いを持つ人の違いから、聾者(ろう者)社会と聴者社会の関係を 4 つに分け、理想的アイデンティティについて見解が示された。パワーポイントを使った報告後、9 月 21 日に放映された NHK・ETV 特集「手の言葉で生きる」のビデオを使い、手話と人工内耳装用などについて問題が具体的に提起された。報告やビデオ映像の際には、パソコンによる文字情報も流され、聾者への「情報提供」をまじかに見ることができた。質疑では聞こえない人のアイデンティティや手話言語、人工内耳などをめぐり意見交換が行われた。

今回のサロンは、この 8 月に急逝された本研究科の三浦義章先生を偲んで企画された。報告者の伊藤さんは三浦先生から直接指導を受けて、今回の報告論文などをまとめたという。サロンには三浦先生の奥様をはじめ、学外からも多くの方が参加され、全体で 22 名の参加者があった。

第 18 回 11 月 17 日(日)

テーマ: 「外国人は憲法上『市民』の権利を持っているか?—フランスにおける最近の憲法院判例・憲法学説を素材に」

講師: 菅原真准教授

今回は本研究科・菅原真准教授が「外国人は憲法上『市民』の権利を持っているか?—フランスにおける最近の憲法院判例・憲法学説を素材に」のテーマで報告した。

レジュメと各種資料にもとづき、1789 年の人権宣言と略称されている人および市民の権利宣言などにより、「人」と「人権」、「市民」と「市民権」についての規定を行う。近代国民国家における「国籍」と「市民権」のあり方、フランスの共和主義的伝統による「公的領域からの外国人の排除」をあとづける。そしてグローバル化にともなう共和主義的伝統の「揺らぎ」、憲法改正による EU 市民の権利の憲法典への挿入とその効果、新しい市民権について問題提起した。法学者らしい憲法条文や憲法院判例、憲法学説を素材にした緻密で興味深い報告であった。

10 月に赴任した菅原さんの「お披露目」ということもあり、学部生を含め 20 名の参加があり、30 分余りにわたり活発な質疑が行われた。外国人の権利、市民権のあり方について、これまでの「共生」研究などと関わらせて今後とも議論していきたい。



● 市役所の小川さん、哲学者になる 転身力

市役所の小川さん、哲学者になる 転身力標記タイトルは小川仁志さんの近著の書名である。とにかく面白く、「ため」になる本だ。「宣伝」をかね目次を紹介しよう。

- 1 章 それは挫折のドン底生活から始まった
- 2 章 夢を実現するための転身と、生活を両立させる方法

- 3 章 生きがい発見！「市役所の小川さん」
- 4 章 「働きながら」大学院で研究するという選択
- 5 章 社会人大学院受験のための対策
- 6 章 仕事と大学院、二足のわらじの履き方
- 7 章 プロの研究者を目指す人の〈小川式〉 11 のステップ
- 8 章 「哲学頭」で生活も仕事もうまくいく

小川さんは京大を卒業して総合商社に入り、その後「苦難のフリーター」時代を経て、名古屋市職員と大学院生の二足のわらじを履く。徳山高専准教授に採用され、大学院博士後期課程を修了して哲学者として活躍している。本にも紹介されているが、私の前期課程と後期課程の「地方財政研究」の講義に皆勤で出席し、「まるで窮地に立たされた政治家のごとく、いつも熱弁をふるっていた。」光栄なことに、私の講義には2回受講してくれたとのことで、市役所職員から哲学者になった小川さんに感謝したい。

この本を「宣伝」するのは、ぜひ一読してもらいたいからだ。小川さんの転身力が、心の底から伝わってくる。「なにそ精神」で挫折のどん底から這い上がる姿に感動を覚える。まさに「心が動く、勇気がわく！人生を変えたい人のためのガイドブック」だ。長年にわたり大学に身をおき研究教育を続けている私にとっても、大いに刺激を受け「反省」を迫る内容だ。わが大学院人間文化研究科に対する「小川式」自己点検・評価の書でもある。「名古屋市立大学の名前を私が有名にします」と、博士後期課程に進学したという。この本は名市大、とりわけ歴史が浅い人間文化研究科の名を広めてくれることは間違いあるまい。嬉しいかぎりだ。

山田 明(同研究科教授)

### ● 乳幼児水泳国際シンポジウム」の報告

2008 年乳幼児水泳国際シンポジウム名古屋大会を 11 月 21 日 22 日ウエスティンナゴヤキャッスルにおいて開催しました。

この大会は水中運動を通じ乳幼児の健全な心身の発達に寄与すべく国の内外から約 200 名の関係者が集い研究発表や意見の交換会をしました。

プールワークショップにおいては日米の赤ちゃんを含めた子ども達の交流会を行いました。日本側からは水中運動を育児の一環として捉えた教育的見地から発表がありました。海外の発表者は、生活環境の中で水の事故から己の命を守る術の実際を 10 ヶ月の赤ちゃんから 3-4 歳児達の訓練の結果を披露してくれました。

水の領域の広さをあらためて認識しました。またこの大会開催にあたり、名古屋市立大学の後援をいただき人文社会学部、学びの会の方々のアカデミックなサポートをいただきました。感謝申し上げます。

学問は知識を究めることだけでなく、愛と絆も不可欠な要素と感じました。

齊藤典子(研究員)



### ● コラム 笑われた笑古先生

毎月一回、沖縄文化を学ぶ会を開いておりますが、ここ数年は真境名安興の「備忘録」を読んでいます。『真境名安興全集』では、「笑古漫筆」と称しておりますね。

この備忘録には、ときどき「方言研究」という項目で、ことばが並んでいる箇所があります。たいていは、日本語と琉球語との対比をしているのですが、なんだかよくわからない、というか笑える用例がたびたび出てきます。

一昨日の勉強会でも、そんなのが連続して、参加者は笑ってばかり。たとえば、「クチザヒサ」ということばについて、「野良で口淋しくなると芋大根手あたり次第にうまいうまいと囁いた云々」という例が挙げられています。どうして、こんな文が出てくるのでしょうかねえ？「ムカムカ」も、「迎ひ酒の癖として最初の一杯は鼻に香が入り候ては、とてもムカムカと致し唇まで持ってゆけず候云々」とあります。

この調子のがとても多くて、何か文学作品など出典があるのか、はたまた、笑古先生の創作文なのか、いずれにせよ何か意図するところがあるんだろうなあ、と思わざるを得ないのですが、いかんせん、笑古先生ほど頭がよくない私には、ただただ「？」と笑いを交々するだけ……。

さ (研究員)

● 「市民学びの会」から

「市民学びの会」の会員は、人間文化研究所サイエンス・カフェなどの行事に積極的に参加されています。大きな柱として「学習サークル」(英字新聞・哲学・自分史)を打ち立てています。連続講座、ミニ講座なども開催しています。

一般市民が自ら学びたいテーマを持ち込めるような活動にご支持・協力をお願いいたします。

中村裕子(「市民学びの会」)



● トーキング・カフェ

4月からの新企画として、「トーキング・カフェ」を毎月第2・第4木曜日の15時から18時まで研究所で開催しています。研究領域の違う院生や教員と出見え、つながりを作る「場」として企画されたものです。担当は、研究所特別研究員の重原淳子さんなどです。

◇ 今後の研究所主催行事の予定

● Human & Social サイエンス・カフェ

・12月14日(日) 有賀克明教授

「科学ってこんなにおもしろかったの!?—理科ぎらいで、ああ、損した!—」

・1月18日(日) 別所良美教授

「歴史認識と共生」

● マンデーサロンの予定

・12月15日(月) 16:30~

フリーディスカッション「2008年の回顧と展望」

政治・経済・社会・文化など語り合いたいものです。

・1月26日(月)16:30~ 2F 音楽室

「アルゼンチンタンゴの演奏とお話」

ブエノスアイレスに留学中の中村樹里さん(ヴァイオリン)とその仲間(バンドネオン・ピアノ)、阪井教授(コントラバス)によるコンサートを行います。アルゼンチンのホットな社会事情なども語ってもらいます。

・2月16日(月) 16:30~

「城下町名古屋の生活空間論」

筒井 正さん「市民学びの会」会員

筒井さんは、元新修名古屋市史民俗部会専門委員を務めた経緯があり、リサーチに基づくお話が期待できません。

編集後記

人間文化研究所が7階へ引越し、研究所を覗いてくださる方が減り寂しい次第です。それでもなぜか、ラッキーなことが多いです。

★院生へ★

研究所内に、デスクトップパソコンを1台設置いたしました。

インターネットにもつながっていますのでご活用ください。



(な)